

## 2011年度教養文化研究所第1回公開講演会報告

教養文化研究所所長 竹 中 彌 生

教養文化研究所は、7月20日(水)13時20分より、明治大学講師で京劇俳優の魯大鳴氏を7405教室に迎え、「実演を交えた京劇講座」という題で、本年度の第1回公開講演会を開催した。当日は、台風が接近しているという不安定な天候にもかかわらず大勢の聴衆が集まった。

中国北京生まれの魯大鳴氏は1976年、北京市戯曲学校で京劇を専攻。卒業後、北京風雷協劇団に入団された。1987年来日以来、舞台、テレビ、映画などに出演される他、宝塚歌劇団を始め、舞踏家への京劇指導を行なうなど様々な場面で活躍されている。魯氏は京劇俳優であると同時に、中国・四川州に伝わる川劇の特別な技術である「変面」の演者でもある。

講演ではまず、変面の衣装を付けて音楽に合わせて登場。踊りながら、様々な身振りの間に、次々と色や表情の違う面を手品のように変え、観客は不思議な世界に引き込まれた。

「変面」の踊りの後の講演では、京劇の登場人物たちの決まりごと、京劇役者の要素、化粧、衣装など、京劇を鑑賞する上で役に立つ事柄について流暢な日本語で、時折身振りと実演を交えながら、分かり易く説明され、予定の公演時間はあっという間に過ぎた。

講演後には、多くの観客から質問があり、魯氏は大変丁寧に質問に答えられた。中には、京劇に詳しい方、中国の留学生からの質問もあり、講演がさらに興味深いものになった。

## 実演を交えた京劇講座

**司会** 台風が来るかという不安定なお天気の中、皆様ようこそおいでくださいました。

今日は、京劇俳優の魯大鳴先生に講演をお願いしたいと思いますが、まず最初に、先生の「変面」の実演を見ていただくことといたします。

〈変面の実演：音楽にのって踊りながら、一瞬で顔をさまざまに変化させる〉

今、何回お面が変わりましたでしょうか。数えていらっしゃいましたか？ 私はちょっと、数えそびれてしまいました。

それでは、魯先生のことを少しご紹介させていただきます。魯大鳴さんは1958年に北京でお生まれになりました。そして、北京市の戯曲専門学校を卒業されました。そのあと、北京風雷京劇団という京劇団に入団されて、日本には1987年にいらっしゃいました。日本にいらっしゃるきっかけとなったのは、この京劇団にいらしたときに、学校を訪問した日本の観光客に京劇のいろいろなものをお見せになると、とても興味を持って見てくれた。だから、日本に行って京劇を皆さんに広めてみたいとお思いになったのが、きっかけだったそうです。

そして、日本にいらっしゃってからは、舞台やテレビ、映画などにたびたび出演していらっしゃいます。2009年4月からは、NHK教育テレビの「テレビで中国語」に出演なさったり、「おにぎりパンダ」のナレーションを務めたりなさいました。2010年5月には、同じ番組の中で、老北京人の役を担当なさいました。現在は、日中友好協会東京都連で中国語会話の講師をすると同時に、明治大学の法学部で講師をしていらっしゃいます。奥様と息子さんと東京に住んでいらっしゃって、実演を兼ねた京劇講座もあちこちで開いていらっしゃいます。

この変面というのは、私も今日初めて見せていただきましたけれども、日本でもまだあまり知られていない技ですね。それでは、これからその変面について、それから京劇についてお話しいたしましょう。どうぞよろしく願いいたします。

**魯** はい、今日は暑い中、ありがとうございます。中国語を習ってるかたがた、そして中国語がわからなくてもかまいません、今のは単純な、誰でも楽しめる技でござ

ざいます。これは、中国語では変面という技なんですけれども、まずはこれについてお話ししたいと思います。これは今、中国ではものすごくはやってる、どこでも見られる技です。

なぜこういうふうに関心があるかといいますと、本当は、これはストーリーの中の人物なんですね。この人物がびっくりして、あるいは色々な気持ちの変化によって、一瞬に顔が変わる。だいたい人間であることは少なく、妖怪とか、鬼とか、人間じゃないものがよく表現されます。元々は、これは京劇のものではないんです。京劇にも、変面という技がなかったわけではない。この変面を取り入れる前にも、京劇のステージに変面の技がありました。ただ、今のように回数が多いし、やり方も違います。こんなに優れたやり方ではなかったのです。

昔の京劇のステージでは、変面をする前に、前もって粉を用意します。例えば白い粉、あるいは黄色い粉。そのような粉を、お椀の中に入れて、前もってテーブルの下とか、後ろとかに準備します。で、人物は変わる前にこれを持って、後ろを向いた瞬間に、この粉を吹いて顔につけるんですね。私は今日はメイクしてないんですけれども、例えば赤いメイクをしていて粉が白ですね。後ろを向いた瞬間にその白い粉を吹いて、顔色が変わったというようなことが、昔、京劇ステージの変面といわれた物です。これが一つ。

もう一つのやり方は、前もってメイクのドーランを用意して、後ろを向いた瞬間に、例えば顔の真ん中に、赤2本塗ったり、こっちは黒2本塗ったりする。お客さんが見たら、あ、変わった、というようなやり方もあります。

でも、これはどうしても、今のようなやり方には勝てないんですね。これはどういうものかといいますと、中国の地方劇のものなんです。中国には、360以上の地方劇があるんです。だから、この数と同じくらい、いろんな技があるんですね。変面はどこの技かといいますと、四川省に川劇せんげきという芝居がありますが、川劇をまねたんです。

今は京劇がどんどん取り入れて使えるようになったわけですが、もっともっと素晴らしい技もあるんです。本当は、最後に自分の顔に変わって、また戻るんですよ。また1枚、2枚、3枚、というようなやり方もありますが、京劇は、今のところ、まだそこまではやっていないんですね。京劇は取り入れた以上、川劇とか、そういうことはもういわない。京劇の変面となります。これは図々しいというか、京劇は、今までそうやってきたんですね。演目から技まで、すべて、地方のいいものだけを取り入れてきたわけです。われわれ人間と同じように、京劇はいいものだけ、栄養

だけとって、あとはいらぬ。私たちが食事をとる時と同じで、唐揚げ食べたら鳥さんになる人はいません。栄養だけとって、あとはもう全部いらぬのです。そうすると、今の客には、京劇のステージの変面となる。これが今現在京劇のステージでよく見られるようになった変面というわけです。

本当は、こういう単純な芸だけ見せるのじゃなくて、ストーリーの中だと、もうちょっとわかりやすいかもしれません。この人物は、今すごく焦ってて、気持ちが変化するたびに顔色が変わった、というふうに推理的に考えられるんです。今は単に、顔が変わった、何枚変わった、となるんですけれども……。でもこれは、国では今でも「秘密、秘密」といわれる技なんですよ。

昔から「伝男不伝女、伝内不伝外」という言い方があるんですね。「伝男不伝女」。男の人になれば教えられるけれども、女のかただとどうしても教えてくれない。なぜかという、女のかただと将来お嫁さんになって、結婚して、外に行く人間になるので、その技を持っていくからダメなんですよ。

そして、もう一つは「伝内不伝外」ネイは内の字。つまり、日本語では芸能人関係者とか、身内ですよ。ならばいいんだけど、ワイは外の字で、素人、あるいはアマチュア、そのような人には教えられない。

でも、これはもう随分前の話になります。今は大分広がって、普及とまではいなくても、中国に行かれるんだったら、ちょっといいレストランならば大体、変面の実演つきで食事しながら見られるんですよ。これはまた一つの楽しみです。お客さんの目の前で一瞬のうちに顔が変わる。びっくりする。今はそういうことになっています。

ただ、正直に言いますと、まだ日本ではそれほどどこでも見られるものではないので、まずは、今日はこれを皆さんに見せて、こういう楽しいことがあるんですよと紹介したいと思ったのです。

さて、ここで京劇の話に入りたいと思います。京劇というものは、とてもわかりにくい、とよく耳にしますが、京劇はあくまでも娯楽なんです。スポーツ観戦と同じようなことで、ルールさえわかれば誰でも楽しめるんですよ。ただ、ルールがわからないと、面白くない、わかりにくい。私が日本の野球を見る、相撲を見る、歌舞伎を見るのと全く同じことなんですよ。ルールさえ前もって知っていれば変わってくるんです。

なので、今日は少しそのルールのことを、皆さんにお話しして、これからまた京劇を鑑賞する場合は、少なくとも隣のお客さんよりは倍以上に楽しめることを保証

いたします。最後までつきあっていただいで、これをお土産に持って帰って、これから一つの楽しみが増えてもらえば、ありがたいですね。

ちらしに書いたとおりの順序で、一番最初は京劇の役柄についてお話します。役柄というのは、登場人物、出てくる人のことです。京劇のステージには2人の芝居もありますが、20人の芝居もあります。たくさん登場人物がいますが、それはもう覚えられない、わかりにくい。まずはそこが、どうしても入りにくいところですね。実はね、京劇の役柄は四つしかないんです。この四つの役柄を前もって知っていれば、見所が変わってくるんです。おばあさんが出てきた、じゃあ、これから立ち回りを見よう、と思ったら大間違いです。そこを前もって知っていれば、入りやすいと思います。役柄は四つしかないので、この四つさえ覚えれば、どんどんわかっていくんです。

この四つ、まず一番目は、「シヨン」で、生活の「生」の字を書きますが、これは全部男の人が担当する役柄です。特徴としては、地声で歌を唱う。せりふを言う。じゃあ、地声とは何ですか。地声というのは自分の声。皆さんご存知のオペラと違う。オペラはどんな人物にしても、歌い方は一つ、美しい歌声が求められて、発声練習をして、歌いますね。「あーあーあーあーあー」誰が歌うのかわからない。京劇は違います。京劇は自分の声で唱う。つまり、これはヤマグチさんが唱ってる、これはササキさんが唱ってる、一声ですぐわかります。

じゃあ、地声とは一体どういうものなのか、ここで短い曲を唱います。これは、三国志の中に諸葛孔明しょかつこうめいという人物がいて、彼が戦争に行く前に、自分の部下に指示をする歌なんです。とても短いけれども、どういう唱い方が地声なのか、知ってもらいたいですね。じゃあ、何もなくて唱ってみますね。

〈諸葛孔明の曲を唱う〉

このように地声で唱うんですね。色々流派がありますが、この唱い方で、この声で、何々流派となるわけですね。このような声を、地声というんですね。

ラオシヨン  
老生は必ず地声で唱ったり、せりふを言ったりします。そしてもう一つの特徴は、ひげをつけて登場するんです。ひげ。京劇ステージのひげは、ドラマと違って描いたものではなくて、耳に掛けるんですね、ひげを。耳に掛けて、ここで唱うんです。話すだけならそんなに難しくありませんが、あまり口が動くところとちよつとちよつたりとか、動いたりとかするので、これもまた一つの練習です。このひげの色は、三つ

あります。この三つの色で、人物の年を大体判断できますね。つける色はとても簡単。白、黒、灰色。わかりますよね。白が一番年上、黒が一番若い、灰色はその真ん中。昔の人物は37歳とか、46歳とか、そういう具体的な歳はなかなか出ないですね。大体このひげの色で人物の歳を判断できます。老生という男のキャラクターです。

これに対しては、<sup>シャオシヨシ</sup>小生もいます。小さい生と書いて小生。小生は老生とは正反対で、若くてまだ結婚してない。とてもカッコよくて、そういうような役柄なんですね。この一番の特徴が声の使い方です。私たちのこのような普通のしゃべり方ではなくて、作り声と裏声をミックスしてせりふを言うんです。最初は聞き取りにくいかもしれませんが、実は若い女の人たちにすごく人気がある役柄なんですね。三国志の話となりますと、<sup>チヨウユ</sup>周瑜という人物がいますが、それが小生の役柄なんですね。カッコいいでしょう。将軍ですよ、若くて。で、武技も強いし、とても人気がある役柄なんです。

ただし、これは伝統的な芝居でしかやらない役柄なんですね。なぜかという、現在の芝居だと、こういうシーンが出てくると、普通のしゃべり方、唱い方だと、なんかどうも、日本語でいえば、おかまみたいな話し方になっちゃうんで、現代劇には絶対出ません。古典の芝居にだけ出てくるんですね。老生とは正反対で、絶対ひげはつけません。きれいな唇をかいてあります。小生という男の役です。

そしてもう一つ、立ち回りを中心にする<sup>ウーシヨシ</sup>武生もいます。武生は立ち回りを中心にする役柄なんですけれども、2種類があります。これは「長靠」って書いて、中国語で「チャンカオ」。もう一つは、「短打」って書きまして、「ドアンダア」。この2種類があります。武生の役柄だから両方とも練習するんですけども、ステージとなると、長靠の場合は、皆さんテレビで見たことがあるかもしれませんが、背中に4本旗をつけて、普通は底の高い靴を履いて戦ったり、唱ったり、演技をする役柄ですね。例を言いますと、三国志の中の<sup>チヤウユン</sup>趙雲という人物がいますが、これが長靠なんですね。

次の短打の場合はとても高い靴ではなくて、衣装は靴から帽子まで全部同じデザインした衣装を着て、わりと動きは早い。跳んだり跳ねたりするときもあるんですけども、立ち回り役とは、またちょっと違うんですね。これも男の人の担当する役柄です。

たいがい男の人はこの三つでまかなわれて、自分の専門に入って練習するんですね。老生、小生、武生、これは全部男の人です。

そうして、2番目は、旦那の「旦」と書きますが、これは全部女の人が担当する役柄なんです。まず細かく分けると、一番目は青衣チンイという役柄です。これは京劇に詳しくないかたがたは気をつけてほしい。なぜかというとなんて平気で、立ったままで10分、15分、唱うんです。わからないと、本当にちょっと退屈なぐらいです。帰りたいにも帰れない状態になっちゃうと困るんですよ。だから、この役柄は行く前に、ぜひ調べてほしい。前もって知らないで、本当は歌だけでものすごく長く唱うんです。10分、15分の曲はいっぱいあります。ただし、これは京劇では女の人なら誰にとっても憧れの役柄なんです。どっちかというとなんて主役で、歌唱力が求められて、大変な役なんです。唱う、とにかく唱う。これは女の人の役。

そして、「花」の字を書いて花旦ホワタンという役柄もあります。これは若くてまだ結婚していない、歌よりは、せりふと演技を中心にする役柄なんです。花旦の場合は、歌が入ってもそれほど長くない。もう2行、4行ぐらいで、さっさと入ってくる。演技とせりふを中心とする役なんです。

そして男と同じように、武旦ウータンもあります。立ち回りを中心とする役柄なんです。武旦は、京劇の場合には一つの特徴があります。彼女は真ん中にいて、周りは4人、あるいは8人、あるいは12人とか。で、戦う場面で、相手が刺すつもりで槍を投げるんですよ。槍を空中に投げて、彼女は足で、その槍を蹴り返します。この技があるんです。皆さんもしかしたらテレビで見たことがあるかもしれません。すごく鮮やかなステージになるんですよ。あちこち、もうとにかく空中にはいっぱい槍がありまして、そればかり練習して大変な役柄です。ただ、これは彼女だけではなくて、一つのチームワークになるわけで、この技を毎日毎日練習するんですよ。男の私たちがあれ見ると、どれもリアリティーがあって、場所は取るし、失敗したら槍がどこに飛んでいくのかわからないし、すごくやっかいな役柄なんです。でも、人気がある。カッコいいです。

そして最後にもう一つ、おばあさんの役は老旦ラオタンといいます。おばあさんですから、当然それほど動きは激しくないんですよ。歌とせりふ、演技中心の役柄です。老旦と同じように、地声で唱ったり、話をしたりします。

そして3番目は、「浄」で、これは隈取りがある。メイクで一目でわかる。この役者さんたちはみんな、頭が坊主になる。なぜかといいますと、メイクはそこまでメイクをします。もう全部髪の毛を剃って、ここまでメイクをします。そうすると、顔は大きくなるわけですね。動きも衣装も全部大きくなる。これは日本の歌舞伎の隈取りに似たようなメイクをします。これには3種類あります。正しいという字を書く

「<sup>ジョンジン</sup>正浄」。これに対しては、副の字を書く「<sup>フージン</sup>副浄」がいます。そして、立ち回りを中心にする「<sup>ウージン</sup>武浄」もいます。歌を中心にする、演技、せりふを中心にする、立ち回りを中心にする。どっちにしてもメイクは同じです。

よく考えてみましょうか。ここまでメイクして、ここからここまではかぶり物しますよね。かぶり物は、さっき私がかぶったような物です。これぐらいの面積でこのスペースで、あのかぶり物をするんです。どれだけ大変なのか。これが落ちたら話にならないです。落ちないために、ものすごくいろんな工夫して、役者さんたちはかぶり物だけ、本番ぎりぎりのところでこれを縛るんです。なぜかという、いちど縛ったら、しばらく縛らなくても済むんですよ。ここは感覚がわからなくなるぐらいきつくなる。そうすると、気持ちが悪いんです。ただし、役者はステージに出るとすべて忘れちゃうんですね。もう集中して、唱ったり、しゃべったり、いろんな演技をしたり。で、楽屋に入った瞬間にワッてくるんです、こう頭に。だから、これは一番ぎりぎりのところで出る前に縛ってもらう。そして入った瞬間にスタッフさんにまた取ってもらう。大変な役です。

そして、冬夏関係なく綿入れを着るんですよ、服着る前に。体を大きく見せるために、綿入れを先に着るんです。その上に衣装を着る。本当に暑くて暑くて大変な役です。幸い男の人たちが担当する役柄なので、今でも全く同じやり方で、学校でもそういう授業をやっています。

最後のもう一つは、「<sup>チョウ</sup>丑」。日本語で言えば道化役ですね。ピエロ。お客さんを笑わせる。その場合はそれほど歌が入っていないです。2種類しかないです。文と武の<sup>ウエンチョウ</sup>違い。文 丑は、そんなに唱わないんです。せりふが多い。お客さんを笑わせる。そしてストーリーもつながるようにして、いろんな場面に出てくる。<sup>ウーチョウ</sup>武 丑はほんとに体を使って、跳んだり、跳ねたり、いろんな表現を体でします。丑の特徴は、顔の真ん中だけメイクを白く塗ります。円かたり、四角かたり、いろんなちょっと小さい違いがありますが、基本としては、顔の真ん中を白く塗るのが、京劇ステージの道化役なんですね。

これがすべて京劇ステージに登場する役柄です。さっき言ったように、これを覚えると見所が変わってくる。見所が変わってくると、自分が楽しめるところが出てきますよね。そうすると、普通のお客さんとは随分違ってくる。

こんな大事な役柄を、誰に決めるのか。京劇の役柄は決まった以上、基本としては変わらないんですね。ずっと死ぬまで変わらない。なぜかという、役柄が決まると専門的な練習に入っていくわけです。途中で変わると、ものすごく大変だ。も



う間に合わない。そういうことで、役柄を決めるのを大事にするわけですがけれども、それでも時々はずれるところがあるんですよ。

なぜかという、男の人は大体12、3歳ぐらいになると変声期という声が変わる時期がある。今までは、A B C D E F、Fぐらいまで出ても唱えるんですけども、変声期となると、これからFまでは唱えるかどうかわからなくなる。この問題は、今でも存在するんですね。病院の先生でもわからないし、京劇団の先生もわからない。本当に賭ける部分があるんです。せつかく老生役に決まったんだけど、これから唱えるかどうか、わからないところがあるんですね。

声のことはすごく大事ですが、あと動きの違いもあります。

例えば、それぞれの役柄が相手を刺すという動きを見てみましょう。老生、<sup>シヨ</sup>生の場合は相手を刺すのにも、とてもおとなしくてきれいに、こういうふうに刺します。そして女の人、<sup>クン</sup>旦の場合はまた違います。旦はこうなります。これも相手を刺してるんですよ。でも、女の方はこんなに違うんです。<sup>ジン</sup>浄もまた違う。体も大きい、メイクも大きい、動きも大きい。これも相手を刺してるんですよ。同じ刺すんだけど、動きは違う。道化役もまた違う。何となく笑わせるような動きをするんですね。

これを変えるのは、ものすごく大変なんです。だから、役柄が決められた以上は、自分としては変えたくない。自分の親がいくら反対しても、言い合いしても、かっこいい、ハンサムなのに、道化役に決められたらしかたがありません。ということで、この役柄のことが皆さんの印象に残ればありがたいですね。

次に、ちらしに書いた2番目のお話をしたいと思います。京劇役者の要素というか、練習の内容、これも四つあります。これは役柄には関係なく、誰でも練習しなければならないものです。

まず1番目は、中国語では唱<sup>チャン</sup>というんですが、歌ですね。チャンはものすごく大事なんです。なぜかという、さっき言ったような声のこともそうですけれども、この声は、生まれつきのものが多いですね。あとは、いくら練習しても越えられないところがあるからです。私はあの人よりは高く唱えない。じゃあ、これから24時間寝ないで頑張ろうとやっても、できないことはできないですね。だから、これは恵まれた要素も入ってるわけだから大変なところです。

そしてまたオペラと比べるんですけども、例えば発声練習となると、オペラとは違うんです。オペラにはピアノの先生がいます。先生の指導で「あーあーあ」と歌うんですけど、京劇はそうじゃないんです。伴奏とか何もありません。朝起きたら、要は、食べないうちに発声練習する。何も飲まない。つまり、喉に何も通らな

いうちに発声練習するんですね。自分の一番低いところから徐々に上のほうへ向かうんです。できれば、川のある所、木のある所、要するに空気がきれいな所で発声練習する。毎日毎日朝、練習するんですけども、大体こういうふうに練習するんですね。

自分の一番低い所からやってみましょう。「あーあーあーあーあーあーあーあー」。これは一つ。また「い」の発音もある。「あ」は口を開けて「あ」、「い」は口を閉じかけて、「い」。この二つをこういうふう<sup>に</sup>に発声練習をする。これは単に声の練習だけじゃないんです。これを発声していく間に、この<sup>タンティエンジチイ</sup>丹田之氣、へその当たりのこの力を練習してるんですね。この息とバランスを取りながら発声練習をしてるんです。一番低い所から高いところまで、この間に一気に唱う。例えばこれ以上はまだ唱えるんですけども、気がなくなったらもう唱えないですね。これ以上はもう唱えないんですが、まだ気がいっぱい残る、それでもだめです。このコントロールをしながら発声練習する。よく計算して練習してるんですね。「あーあー」、あとどのくらい、あとどのくらい、と考えながら、この気のことと声のことと練習するんですね。これは科学的な練習法といえ科学的、オペラから見たらとんでもない。それはどっちもどっちですけども、とにかく京劇はこういう発声練習をするんですね。これは朝。

そして授業に入りますと、今度は伴奏の先生が入ってくる。京劇の伴奏は、皆さんご存じの、<sup>きょうこ</sup>京胡という楽器なんですね。<sup>にこ</sup>二胡といたら皆さんはご存じだと思いますが、二胡よりはもっと音が高くて細い、聞き取りにくい楽器なんですね。これが京劇の主な伴奏楽器なんです。京胡の先生が入ってきて、この授業で、例えば三国志の歌だったら、同じく低い所からFまで唱えるんですけども、最初から、A B…Dから唱うんです。また同じく少しずつ上について。そういうような歌の練習ですよ。これは歌の授業です。そして京劇の発声の練習法です。役柄は関係なく、誰でも練習しなければならない。

そして2番目は、記念の「念」の字を書きます、これはせりふ。京劇ステージのせりふは普通の日常会話と違ひまして、2種類あります。<sup>チンバイ</sup>京白、東京の京の字に白を書きます。もう一つは<sup>ユンバイ</sup>韻白。韻白は、伴奏がなくても自分でリズムを作りながら、詩を吟じるみたい言い方なんですよ。皆さん、中国語がわかってらっしゃるかもしれないから、聞いてみましょう。京白の場合はとてもわかりやすい。わからなくても、その言い方の違いをわかってほしい。まずは京白。〈中国語のせりふ〉。ほぼ日常会話とあまり変わらないような言い方ですね。もう一つは韻白。これがリズム

ムを取りながら、また詩の内容にもよりますが、言い方が変わっています。韻白はこういうふうに言います。〈中国語のせりふ〉。伴奏がなくても、その動き、詩の内容、いろんな意味でこういう波を取りながら、せりふを言うんですね。これを、練習しなければならぬんです。

というのが、また字の発音が違います。例えば中国語がわかっても、四声とか、そういうのは、もうとんでもないです。どこに飛んじゃってるかわからないぐらいです。本当に難しい。だから、ここだけの話なんですけど、じつは中国人、京劇を見ても、字幕を見るんですね。何を言ってるのか、何を唱ってるのか、わからないから字幕を見るんです。ある意味では、私たち全く同じなんです。だから、せりふも授業で練習しなければならぬところなんです。とても難しい。

普通は、唱うことは頑張ってる練習するんですが、せりふはあんまり練習しない人もいるんですね。それではだめですね。京劇界の言葉で、「千金話白四両唱」という。せりふは千両くらいの重さがあるとしたら、歌はもう四、五くらい。それくらい、要するにせりふを練習しなさいという意味なんですね。ですから、このせりふのことも、なるべく役柄は関係なく、真面目に真剣に練習しなければならぬ。

そして3番目は、これは日本語の字がないんですけれども、「做<sup>ゾウ</sup>」という、仕草。京劇のステージは、皆さんご存じのように、基本として舞台装置は使われていません。何を表現しようと思っても、役者さんたちの体で表現するんですよ。そうすると、この動きはものすごく大事になるわけですね。そして、約束事も入っていて、みんなその約束事を守らなければならぬんです。

例えば、私がここで一つの動きをします。何も説明がなくて、何をやっているのか、もしかしたらさっぱりわからないかもしれません。もう一回、説明をしながら動きます。皆さんも見てください。このような動きですね。例えば立ってもいいし、座ってもいい。さっぱりわからないですね。私は部屋の中で誰か待ってる。座って待ってる。なかなか来なくて、ドアを開けます。昔の日本でもありますよね、こういうドア、自動ドアじゃなくて。ドアを開けて、ここの1歩はすごく大事ですね。この1歩は家から出ます。出ました。町を見ます。まだ待ってる人は来てません。そして、戻ります。これがまた同じことで帰ります。ドアを閉めて待ちましょう。この動きで、前もってお客さんと打ち合わせとか、何にもないですよ。でも、私たちは実はコミュニケーションを取ってるんですね。何を取ってるかといいますと、このステージの真ん中には、今はドアがあるということが認識されいてますね。そうすると、次の役者さんが出てきますと、必ずここで入っていきます。こうすると、

皆さんにはおかしくないんです。真ん中にドアがあるんだから、当然そこで入るんです。逆に言えば、ここから入ってこないと、皆さんはおかしいと思う。ここがドアだと、ここは恐らく壁でしょう。壁から入ってくるわけがない。そういうことがたくさんあります。

階段上って、1 2 3 4 5 6 7 8, 8段上がって、2階に来ました。下りるときに6だったら、転げちゃうんですね。お客さんは数えてないかもしれませんが、役者としてはだめです。私一人ならまだいいんですが、違う役者が出てきても、同じ8じゃないとだめなんですね。そのような約束事を、全部この授業でやるんですよ。

京劇のステージは、本物の舞台装置は求められてない。求められるのは、役者さんに、本物みたいな動きが求められる。そうすると、何もない舞台で何でも表現できるようになるんですね。ここに部屋があると、部屋のこししか表現できない。部屋がないからこそ、いろんなことを表現できる。そこが京劇の賢さですね。うまくこのステージを利用して、いろんな場面を表現できる。この動きはとても大事です。

また、例えば小道具を借りた動きもあります。この小道具もいっぱいありますから、それが前もってわからないと、またわからなくなることもあるんですね。例えばステージで使われるむち。むちを持つと、この人は今馬に乗ってるんですね、持つだけで。歩いたら馬さんも歩いてる。走ったら、馬さんも走る。降りるときは、このむちを離れた瞬間に、この人は馬から降りたというような約束事。

このようなことが全部この仕草という、ツオの授業で行われております。実は何もないんだから難しい。あると簡単です。ドアを開けてください。ドアがあれば簡単に誰でもできる。ドアがないから難しいですよ。この動作の授業は、本当は見学できれば最も面白い授業なんです。

そうして、4番目は、「打」の字を書きますが、これは立ち回りの授業です。立ち回りといいますと、簡単に楽しめるんですね。人と人のけんか、国と国の戦争、京劇のステージは何でも表現できます。もう一つの特徴は、京劇のステージでは、1人でも立ち回りが表現できます。1人で、例えば相手と戦って、戦って、最後に勝ちました。このうれしい気持ちが高まって踊ります。日本語で言えば勝鬨踊りかちどきですね。槍を持ったり、刀を持ったりして踊ります。この踊りの間にいろんな技を見せます。槍を投げたり、取ったり、最後はきれいなポーズを決めて、これは1人の踊りです。立ち回りの授業も、いろんな技を教えられますね。恐らくそこも、言葉は関係ないから、とても楽しめることだと思います。例えば同じ三国志の趙雲という人が、立ち回りが終わって、最後に自分で槍を1本持って、いろんな技をやる、そ

こは本当に見所なんですよね。それらのところは、前もって知っていればほんとに美しくて楽しめるものです。皆さんも、少しでも私の気持ちになっていただければうれしいな。この立ち回りも役柄は関係なく、誰でも練習しなければならないです。大変ですね。

役者さんはとても大変。京劇、特に『霸王別姫』という映画を見たお客さんは、よく私に質問します。「ほんとに、そんなに難しいんですか」。ほんとに、そんなに厳しいです。

あの映画に出てくる人たちは、私と同じ学校の後輩なんです。今日でも、全く同じ授業をやっています。厳しいんですけども、でも、それぐらいじゃないと覚えられない。特に子供のときは、理論よりは体、ここが痛いんだから覚えるんです。翌日ここが赤くなりました。痛い。そうなったら覚えるんですよ。説明よりはそっちのほうが覚えるんです。実は、大学生もそうなんです。たたかれたら覚えるんです。いくら説明しても、覚えられないんです。本見たりとか、パソコン調べたりとか、それよりは、痛いところは覚えるんですよ。

役者が難しいというのは、この練習内容を見ると、歌、せりふ、仕草、立ち回り。われわれ人間は誰でも、強いところがあれば、弱いところもあるわけですね。特に、自分を自分と比べると、必ず強いところを持っている、その反面、必ず弱いところを持っているんです。京劇の先生たちは、あなたの弱いところだけ永遠に言い続ける。いいところは一つも言わない。先生としては、それは当たり前のことです。当たり前のことだから、言う必要はありません。弱い部分だけ毎日毎日言われる。そこが厳しいですよ。

みんな誰でも弱い部分があるんだから、いいじゃないですか、じゃなくて、400点とも取れなければならない。そういうところが難しい。京劇は、誕生から今日まで、400点取れる役者さんは今でもいないんですよ。必ず自分を自分と比べると、弱いところがあるわけです。そういう意味では、いい役者さんを育てることは、ものすごく難しい。役者になった人間としても、この四つとも100点を目標にして頑張ろうと思っても、実は難しい。自分の弱いところは、どうも越えられないですね。特にさっき言った歌。これ以上唱えないんだから、しょうがないんですよ。役者さんが「難しい、難しい」というところは、そこだと思います。だから、違うほうでカバーして、なるべく全面的に、総合的に、表現できる技をいっぱい身につければ、いい役者になると思うんですね。

そして今度は、京劇の衣装とメイクについて、簡単にお話ししたいと思います。

まず京劇のメイクからいきましょうか。

京劇の登場人物はみんなメイクします。メイクの色もさまざまで、もうわからないぐらい。実は、大まかに分けると、2種類しかないんです。化粧ですね。一つめは、「俊扮」<sup>ジュンバン</sup>。中国語ではジュンバンといいます。これはつまりきれいなメイク。男性も女性も関係なく、みんなきれいなメイクというんですね。恐らくさっきの変面で、最初に出てきた顔は俊扮の顔なんです。そういうような感じ。京劇のメイクは、すべて自分の顔を捨てて1枚の絵をかく、というようなイメージなんですね。そういう意味では、オペラの発声法と似てますよね。自分の顔は、みんなそれぞれ違います。ちょっと鼻が高いとか、低い、目が小さいとか、大きいとか、関係なく、それをすべていらなくて、もう1枚きれいなメイクをかくというのが、京劇ステージのきれいなメイク。これは俊扮というんですね。たくさんの人が登場する場合は、6割から8割ぐらいは、こういうメイクをしてるわけですね。

もう一つはもっとわかりやすい。これは隈取りですね。隈取りは日本の歌舞伎にもありますが、一目見ると似てます。実は、私も歌舞伎に詳しくはないんですけども、歌舞伎とは全然違うんですね。歌舞伎の役者さんは、特に昔の年取った役者さんたちは、例えば電気がなくて暗くても、自分の顔を触りながらメイクできるんです。つまり、歌舞伎のメイクは人間の骨、輪郭に沿ってメイクしてるんです。京劇は違います。京劇の場合は人物になって、人物の気持ち、性格によって、色、形が変わってくるんです。そして、京劇の場合もう一つ特徴は、動物のまねしてかいたメイクもあるんですね。虎になったり、ねずみになったり、道化役もありますね。そして、孫悟空のお猿の顔でしょ。動物のメイクもいろいろあります。これは全部隈取りなんですね。隈取りは、さっき言ったように、まずは髪の毛を剃って、頭の真ん中までメイクする。

大まかに分けると、メイクにはこの2種類しかないんですね。だから、これはきれいなメイクの俊扮、これは隈取り。この二つがわかれば、大分わかってくるんですよ。隈取りは、正直に言いますと、主役をする芝居はそれほど多くないんです。俊扮の場合は、男でも女でも関係なく、主役をする演目がたくさんあります。これはもう、どんどん少しずつ入っていけばいくほど、わかってきます。

本当は、今まではこういうお話しをして、最後に、私もメイクしてお話しするんです。今日は最初に変面をやったので、できなかつたんですが……。京劇のメイクは、本当はとてもきれいなものですね。魅力がある。

でも、これには練習も必要ですよ。京劇でメイクすることは中国語で「找」<sup>ジャオ</sup>とい

うんですね。ジャオは日本語では探す。何を探すかといいますと、自分の顔に最も合う位置を探すんですね。私の目はここに描くんですよって。これは何回も何回も繰り返し描かなければわからない。何回も何回も繰り返して描いて、やっと私の目はこう描けば一番きれいだとわかる。見つからなければ探す。探す。簡単に言えばメイクは2種類しかない、これを覚えれば大分違うんですね。

そして、衣装。京劇の衣装は本当に賢く使われております。その作られた時代は、清と明の時代の衣装を参考にして作られたものです。その大きな特徴は、季節に関係がありません。その人物が今着ている衣装は、冬なのか、夏なのか、それは表れない。どうしても夏を表したければ、せりふで言ったり、歌で唱ったり、あるいは扇子を持てばおわかりになりますね。扇子を持つと、これは冬じゃない、夏です。寒くなると頭にちょっと何か、雪が降った場合に雪をよけるスカーフみたいなのをかぶったり、そういうようなことで表現する。衣装は季節を表現しません。これは一つ。

もう一つの特徴は、衣装はその人物の身分を表すのです。この衣装は皇帝の衣装です。この皇帝はどういう時代の皇帝なのかは、関係ありません。つまり、時代を表現しないんです。衣装でこの人物の身分を表せる。大きな特徴ですよ。どんな劇団でも、各時代の人物の衣装を全部持つことはできないですね、あんまり歴史が長くて。そうすると、皇帝さんの服を1着持てば、どんな時代の皇帝でも、表現できる。天子さんの衣装だったら、どんな時代の天子でも表現できる。そうすると、劇団としては、すべての時代の衣装を持てなくても表現できる。芝居を演じることが出来る。そこが、京劇ステージの衣装の特徴です。とても賢いと思います。どんな劇団でも、一つの芝居で、すべての衣装を作るのは、すごく大変。だから、衣装については、京劇は本当に素晴らしい。

そして作り方。昔の衣装の作り方は、脇役の場合はみんな同じサイズで、誰でも入るようなちょっと大きめのサイズ。主役の場合は、オーダーで作られるんですね。ちゃんと身長を測って、すべてを測って、ちょっと大きめに作られております。そして、衣装の場合は、金糸で刺繍されております。だから、1着の衣装を作るのに、ものすごい時間かかる。そして、刺繍された衣装は、汗かいてちょっと汚れたりしても、なかなか洗えないんです。そうすると、ふだんは大事にするのが一つ。もう一つ、万が一汚れたり、汗や何か臭いがついたりすると、お酒を使います。衣装のスタッフさんたちは、毎日毎日本番が終わると、衣装を掛けて、アルコール度の高いお酒をこの衣装に吹きつけるんですね、こういうふうには、プーッと。すると、お

酒といっしょに蒸発して、汗とか、臭いとかもなくなるんです。衣装の保管法は、今でも同じやり方でやってる。昔の人は頭がいいというか、伝わってきたものだから、なかなか変えられない。今の技術だと、恐らくもっといいことができると思うんだけど、でも、各劇団が同じことをやってる。

そして最後に、この衣装がもう本当にぼろぼろで使えなくなる。そうすると、どうなるかという、燃やす。燃やして、糸の金のところは本物の金を使ってるんで、金はまだ残るんです。少しだけけど、また金を使える。この京劇の衣装は、今までこういう全く同じやり方でやってきたんです。

そして、京劇にはこういう言い方があります。「寧穿破，不穿錯」<sup>ニンチュアンポウ フウチュアンツオ</sup>，どんなボロボロの衣装を着ても、この人物に合えばいいわけです。間違ったらだめなんですね。ボロボロでもいいから合えばいい，間違ったらだめ，というやり方なんですね。

だから、京劇のステージの本番が終わって、楽屋では、この衣装のスタッフさん、本当にカッコいいんですよ。あんなに重たい衣装、大きい衣装なのに、両手で、もうテーブルとか何も使わなくて、手で折り畳むんです。きれいに最後にパーッと。それはね、本当に見事ですね、もう見せたいぐらいの技術なんです。あとは、かぶり物。かぶり物も、京劇の衣装の中に入るんですね。かぶり物は、さっき言ったように、みんな本番のぎりぎりの前に縛るんですね。スタッフさんたちはそれは大変なんです。特に主役の場合は。おそらく日本もそうなんだと思うんですが、主役さんとなるとちょっとわがままかな。どうしてもこうしたい、どうしてもこうしなきゃだめだとか、ありますよね。京劇では本当にそこは強いんで、スタッフさんたち、大変です。スタッフさんたちには決まった所があるんですね。そこに座ってやる。主役の中にはどうしても、ここじゃなくて下手の所でしなければならぬ、そういう役者さんもいて、大変なんですよ。

これがまた、例えば万が一ステージで落ちた場合は、落ち方によって、責任もまた分かれるんですよ。例えばかぶり物の前に、まず「水紗」<sup>シュイシャ</sup>という水で濡らした布でちゃんと縛る。この上にまたかぶり物をする。例えばステージでかぶり物が落ちた場合、かぶり物だけ落ちて水紗、布がまだ残った場合は、スタッフさんの責任なんですね。楽屋に行ったら、どんどん怒ってもかまいません。監督さんも相手に言うんです、「何やってるんだ」。ただし、この布さえも全部落ちて何も残らないと、役者自身の責任になるんです。というのは、この布をやるのはスタッフさんだけど、役者さんが自分でちゃんと判断して、これぐらいで大丈夫、これぐらいで落ちないと、ものすごく、聞きながらやってるんです。「どうですか。大丈夫ですか」



「はい、いいですよ」って、ここで止める。あなたが言ったとおりにやったのに、きれいにすっかり落ちたら自分の責任。この上のかぶり物は、スタッフさんの責任になります。

京劇のステージも面白いですが、楽屋の話はいっぱい面白いことがあります。本当に昔の伝統的なものですよ。だから、皆さんがそのようなことを多少知れば、見るだけではなくて、見ながら考えるんですね。これは落ちそうだな、大丈夫かな、落ちたらどうなるのかなと、いろんなことを考えながら見れば、もっと面白いですね。

また靴も京劇の衣装のスタッフさんのお仕事です。本番前に、スタッフさんは早めに楽屋に入ります。入ったら、まずは高い靴の底の白い所をきれいに塗ります。これはスタッフさんの仕事です。これはちゃんときれいに塗って、ぎりぎり本番前にこれを乾かさなければなりません。皆さんご存じかな。あの高い靴の材料は何か、知ってるかたはいますか。これは、実は紙でできたものなんです。紙を1枚ずつ、1枚ずつ、重ねて、重ねて、あの高い靴ができたんです。この靴は本当に自分の足に合わないといけない。こういうふうに転ぶんですね。足を捻挫するんですね。だから、みんなそれぞれの足をちゃんと測って、オーダーです。測るのは大きさだけじゃなく、足の土踏まずという所かな、こういう所も測るんですよ。そうすると、本当にぴったりします。こうやっても、もう落ちないぐらい。本当にサイズだけじゃなくて、上も下も全部測って作られています。

この紙で作られた所、1枚ずつ紙で作られたものをまず白く塗ります。そして、全部出してきれいに掃除する。そして、ちゃんと用意する。メイクまでは役者さんの仕事なんですね。メイクが終わったらあとは、全部スタッフさんがやります。「はい、靴です。で、衣装はこれ着ます」と着せてもらう。最後に、座って頭のところを引っ張る。衣装さんの仕事は、靴から頭までです。

そしてもう一つ、ひげも衣装さんのお仕事です。ひげは頭のほうのスタッフさんの仕事なんです。ひげの場合は、よくこういう質問をされることがあるんですね。「みんな同じひげ使うんだから、汚くないですか?」。ここ口のところにつくんですけど、こここのとこで、例えばみんな3人、5人使うので、正直のところ嫌ですよ。そうすると、どうしますか。たばこを吸う人たちは、今のたばこじゃない、昔のパイプの葉っぱかな、その煙で消すんです。臭いは消えるんだけど、たばこの臭いはもっと強いんですね。だから、今は科学的なシューシューとやるやつがありまして、本番が終わったらスタッフさんたちがちゃんと掃除してくれる。

そしてもう一つ、それより大事なものは、みんな顔が違う、大きさも違うので、毎回毎回ひげを調整するんです。そのひげを、例えば今日はヤマグチさんが、このひげ使うんで、ヤマグチさんの顔に合うように、こういうふうに調整するんです。役者さんが出てきて、すぐこれをつけたとき、合わないとまた怒る役者さんもいるんですよ。「何やってるんだ、もう時間もないのに」とか。役者さんが自分でやれば一番いいんですけども、なかなか細かい仕事があるんです。ひげも大変なところがあります。

そしてもう一つ、楽屋のことを話したい。楽屋は、いろんな舞台、いろんな劇場で違います。そうすると、何の約束もなく、何の打ち合わせもなく、自然に居場所が決まるんです。基本としては、主役の場合は、かぶり物の所に座ります。脇役の場合は、普通のテーブルの間に座る。道化役の人たちは、座る位置が決まってない。あちこちぶらぶらして、ここはちょっと離れたりと、どこでも座れる。女の人たちは、女性のメイクの所に座る。京劇が最初にできた時代はとても封建的な時代ですよ。男性と女性はものすごく厳しく分けられてるんです。だから、座る場所は決まってないんですけども、何となくみんなそういうふうになった。今でもそうです。京劇の学校だと、学生さんたちは最初はわからないから、先生に座る場所がちがうと言われるんです。「そこは主役の所だから、あんまり座らないほうがいいよ。あなたは脇役だから、そっちに座りなさい」と。

あとは、楽屋に置いた物は、けっして触らない。ここに刀が1本置いてある。私はちょうど刀を使うので、今出てるのでいいんじゃないか。そうじゃなく、それが必ず誰かが置いたもの。槍でも、刀でも、何でも、スタッフさんが置いてあるものは、自分はけっして触らない。これはルールとして、みんなわかっています。

そしてもう一つ、主役が使った物には絶対触らない。例えば三国志の中に関羽という人物がいます。彼は京劇では、ものすごく尊敬された人物なんですよ。この人を演じる役者さんが、まず今日の夜は関羽だから、お風呂に入ってちゃんと全部きれいにして、そしてメイクする。そして、メイクが全部終わりましたら、わざと顔の左側にほくろを一つかくんです。関羽という人物は元々は顔のほくろはないんです。わざとほくろをかきます。なぜかという、お客さんに教えてる。私は本当の関羽じゃないんです。そこまで私は、とんでもないことはいたしません。私は偽物ですという意味で、わざとほくろをかくんです。今でもそうです。

そして、使われた関羽の刀、<sup>ダアダオ</sup>大刀というんだけど、パーッと柄が長くて、頭の所は包丁の形になってる。その道具はもう常に楽屋に置いてあるんです。これが誰に

も触れない。触っちゃいけない。最初からきれいに掃除して置いてある。関羽の人も、これから登場するときは、ちゃんとお願いをして、持って出ていく。関羽は特別の存在ですね、京劇としては。楽屋に入って、関羽の人に会ったら、間違いなく挨拶しなければならない。挨拶しないで行ったら失礼なんです。そのようなことが、楽屋にはいっぱいあります。

それから、楽屋で物をなくしたら、言っちゃいけません。時計がなくなりましたとか、イヤリングとか何とか、言っちゃだめです。それはまずは自分の責任。もう一つは、こっそり探す。探して探して見つからなければ、当日じゃなくて、翌日監督さんに話すんです。基本としては、自分の責任ですよ。今、日本の劇場にはボックスがありますね、100円入れてやる。昔の劇場はそういうのはないですよ。だから、貴重品とか何とか、全部自分で持つ。自分で大事に保管しなければならない。なくなっても言っちゃいけません。そういうルールなんですね。誰かが何かなくした時、聞くのはいいですよ。これは何か探してる、表情も違う。貴重品がなくなれば、何かちょっと真剣な顔になる。「どうしたんですか」、それは聞けるんですけども、自分になるべく言わないようにする。これも楽屋のルールです。

まだまだいっぱいありますけれども、このような楽屋のことも、少し知っていれば面白いですね。大体京劇はこういうものです。私は学校に入って役者の生活してきたわけなので、こういうことが話せるんですけども、そのほかには、京劇に関しては皆さんまだまだ知りたいこと、質問があるかもしれません。私が答えられることであれば、頑張って答えますが、私の話はこれぐらいにしたいと思います。

**司会** では、会場から質問をお受けします。

**質問者 1** 最初に衣装をつけて出られましたが、それはどんな役柄でございましょうか。

**魯** あれは、役柄は関係なく、変面の場合はみんなあのような格好で出てくるんですね。あのマントは、中がなるべく見えないように隠してる、そういう役目もあります。

**質問者 1** もう一つあるんです。変面で、顔が何種類かパッとこう変わりましたね。それはどうしてそんなにパッパとできるのでしょうか。

**魯** 皆さん、これに答えられますか。これは一つの手品と思えばいいです。手品ですけれども、練習は必要です。テクニックも必要です。

実は私も、この技は5年前に教えてもらったんです。その前は知らなかった。でも、日本で見て、どうしてもこれを身につけたい。そこで、友達に頼んで、四川の先生に教えていただけますか、とお願いしました。先生は3カ月考えたらしいです。なかなか答えてくれなくて、最後に、あなたは、昔は京劇をやっていた人だし、友達の関係もあるし、勉強しに来いと。で、四川省に行つて教えてもらったんです。

その教える所がまた面白いことに、先生は部屋の中において、私が家に入ったら、まずはこうやって体をチェックして、カメラとか持ってるかどうか確認されるんです。なんでこんなに厳しいのかと思ひながら入りました。それからそこに座つて先生に、「お願いします」と言つても、なかなか先生は動いてくれない。何も言わない。そこで、あまりきれいな話じゃないですけど、先にお金を出す。お金を払わないと教えてくれない。

なぜかという、恐らく皆さんもそうだと思いますが、これは見ればすぐ、あ、こういうことかとわかる。皆さんの発想は、どこかのボタンをいっぱい押して、パーッと変わると思つてるかもしれない。そうじゃなくて、実は、これはとても細かい手作業なんです。ただ、アンコールは絶対できない。もう1回見せてくださいと言われたら、早くても夜7時ぐらいになります。準備がすごく大変なんです。あとは、このコートを脱いで見せられないですね。コート自体には何もないですが、コートを脱ぐことはできません。そういうことなんです。

あと、先生に言われたのは二つ。一つは、なるべく人に教えないでください。なぜかという、あなたが人に教えたら、あなたの仕事が減ってくる。あなたを呼ばなくなる。中国語の言い方をすると、ご飯がたべられなくなる。これが一つ。もう一つは、お客さんの夢を壊さないでください。これはきれいですね。皆さんは夢を持って見てるわけだから、言つちゃうと面白くない。そう言われると、確かにそうですね。だから、私も本当は教えたいです。なぜかという、みんながやるわけじゃないから。でも、みんなが知つてると、逆に面白くなくなる。ということで、とても言いたいんだけど、申し訳ございません。

あとね、実はもう一つ言えるのは、北京に行つたらレストランで見てください。レストランではもっと近くでやるんです。すると後ろのほうは時々、時々……何かひもみたいな物が若干見える。そこだけ見えます。日本の観客は、カメラ、ビデオも撮るでしょう。上、下、右から撮つてる。要するに、ビデオやシャッターのスピードとの争ひ。このカメラの、カチャが、例えば0.1秒だから、0.1秒以内にこの顔を変えなければなりません。そうすると、撮れないんですね、どうしても。

実はね、今度はまたホテルで、この変面ショーをやるんです。「写真がありますか」と聞かれたんですが、きれいな写真はなかなかない。なぜかといいますと、変わる瞬間は撮れないんですよ。ちょっと動いてるところの写真ばかり、いっぱいあるんです。なかなかきれいなポーズになった写真はないんです。だから、今度はちゃんと場所を設けて写真を撮ります。シャッターと顔が変わるスピードの争い、これが一番いい表現だと思います。どこまで理解していただけたかわかりませんが、すみません。

**質問者 2** かぶり物はとても大事だということで、落ちたときの責任というお話がありました。本番でも落ちることはよくあるのでしょうか？

**魯** いや、そうでもないです。めったにありません。というのは、この大事さは、誰にでもわかっていますから。落ちたら間違いなく、どんな素人にもわかる。特に海外、日本とか、海外公演はなおさら厳しいです。

逆に、一番よくあるのは、小道具が壊れることですね。小道具は、季節によって、あとは、例えば日本は湿度が高く、中国は乾燥してる。それによって、槍がちょっと折れたりとか、そのようなことがよくある。そういうのは、正直に言いますと、お客さんはそれほどめめないんですね。道具だから、切れたから、折れたからといってわからないんですね。

**質問者 3** (留学生から中国語のコメント)

**魯** 中国語ではわかりませんから、日本語で。中国語で「タイシャンイーフェンジョン 台上一分鐘、タイシア 台下三年中」といいます。京劇界の話です。舞台での1分間には、3年間の練習が必要だという言い方なんです。よくご存じだと思います。ありがとうございます。

**質問者 4** 日本の歌舞伎には女形がありますが、京劇でも同じでしょうか？

**魯** 今は、男の人は男の役をやる、女の人は女の役をやるのが基本です。

**司会** そうですね。じゃあ、昔は？

**魯** 昔は女の役者さん、いません。歌舞伎と同じでみんな男の人がやりました。女の人がやるようになったのは、解放(1949年)直前からですね。

**質問者 5** テレビで京劇が放映されることなどご存じだったら、教えていただきたい。

**魯** 京劇はね、毎年の春と秋に2回、来日公演があります。今度は銀座の劇場でやります。今年は5月の予定だったんだけど、地震の影響で来られなくなった。来年はまた来るかもしれません。ちょっと情報見ればわかると思います。毎年皆さん見られます。

**質問者5** テレビでもやりますか？

**魯** テレビではなかなか少ないんですよね。すみません。

**司会** それでは、今日は大変面白い、珍しいお話をありがとうございました。会場の皆様も今日は台風が来るとか、来ないとか、いろいろございましたのに、こんなに大勢お集まりくださいまして、ありがとうございました。また秋になりましてからも、教文研では、なるべく皆様が面白いと思ったださるような公演を、ご用意してお待ちしておりますので、ぜひまたふるってご来場くださいますようお願いいたします。

今日はありがとうございました。